

勝右衛門。前田綱紀の時公女の琴曲指南を勤めた岡山榎校の養子で、寛保三年新知百三十石を受け、安永元年十二月十日六十四歳を以て歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

ヲギ 小木 オウ 珠洲郡木郎郷に屬する部落。能登名跡志に、『小木村は御領分一の潤にて、繁昌也。本町・新町・庄崎というて別れて家居あり。船本と云うて古き者あり。山代屋など、いうて舟問屋あり。勝光と云うて刀鍛冶の筋あり。小木鱈というて名物也。切漬御上へ上る也。』とある。

ヲギイシ 小木石 珠洲郡小木に産する石材。石英粗面岩質凝灰岩で、稍赤味を帯びた白色石基中に、白色礫及び黒色大形礫を含み、質は稍硬い。之と同質の石材は、附近の市、瀬及び眞脇小字郷にも存する。

ヲギイチ 萩市 羽咋郡邑知院内志雄庄に屬する部落。萩市の名は、大永六年十月一宮社務職年貢米錢納帳に見える。又本郡矢駄なる加茂神社所藏應永二年の懸佛の裏書に大工羽咋鬼市住右馬次郎とある鬼市もこれであらう。

ヲギイチジヨウ 萩市城 羽咋郡萩市に在つた。越登賀三州志故墟考に、萩市村領に方四十間の地を里人三日城跡といふとある。

ヲギコウ 小木港 珠洲郡小木の前面をいふ。港口東南に向かひ、越後・越中に來往する小廻船が多く入港する。潤口に日和山があつて、越中・越後から遠く信濃の諸山を望み得る。

ヲギサンガ 萩三ヶ 羽咋郡萩島・萩谷・萩市三ヶ村をいふ。

ヲギシマ 萩島 羽咋郡邑知院内志雄庄に

屬する部落。能登誌に、『鏡取明神は昔は大社にて、勅使下向ありしとぞ。今萩島村に、神主等の子孫として三人有。一軒は其家内にて産することならず。又此者ども二足四足のものを食することならず。取扱ふ事もならず。昔勅使の宿もせしといへり。』とある。鏡取明神は今の志乎神社である。

ヲギタニ 萩谷 ↓ヲギヤチ 萩谷。

ヲギノゲンガイ 萩野元凱 金澤の人。字は元原、通稱左仲、號は台州。越前府中の醫奧村良筑に學び、後京師に出で、多年研鑽し、寛政の初皇子の脈を診して、典藥大允に任じた。九年幕府に江戸に召され、瘟疫論を躰壽館に講じたが、目黒尚忠と議論合はざるを以て歸り、翌年再び皇子の病に侍し、尙藥に補し河内守に任ぜられた。文化三年四月二十日歿、享年七十。著す所吐法編・刺絡編・麻疹編・瘟疫餘論・台州圍隨筆等がある。

ヲギノシヨウテン 萩野正傳 金澤眞宗東派本淨寺の僧。大正十三年擬講に任ぜられ、昭和五年九月十日八十二歳を以て歿。

ヲキノマタ 小木ノ又 オウギノマタ 鳳至郡合鹿の内の小字。

ヲギハラキユウザエモン 萩原久左衛門

前田綱紀に仕へて二百石を領し、御厩方に任じ、寶永六年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

ヲギハラヒコベエ 萩原彦兵衛 父は向駿河守。彦兵衛初め朝倉家に在つたが、後前田利家に屬して三十石を受けた。子孫瓜生氏を稱して相繼ぐ。

ヲギハラヒロツラ 萩原博綿 通稱吉之助。半左衛門。寛延三年父長左衛門の遺知七十石を受け、定檢地奉行に任じ、天明八年二月五

十石を増し、七年六月十一日六十一歳を以て歿した。

ヲギフ 萩生 江沼郡西ノ庄に屬する部落。加越關評記天文廿一年七月朝倉宗滴の加賀に侵入した條に、大將は敷地山に陣取り、玄蕃助・福岡は菅生口、藏谷衆は大正寺、武曾深町はうぎう村に陣取つたとある。北陸七國志にはうぎうにぎうに作る。うぎう・うぎう共に萩生の誤である。

ヲギフケンカ 萩生喧嘩 ↓アツケンカ 萩喧嘩。

ヲギフヒヤクエイ 萩生百觀 江沼郡勅使眞宗西派願成寺に住した。一名廣智。越後の僧朗の門に入つて宗乘を學び、又天台を惠澄律師に、性相を恢麟和尚に習ひ、後歸郷して講筵を開くこと四十年、遂に勸學職に擢んでられ、明治以後權少致正に上り、十四年三月十二日歿した。齡八十五。大乘院と諡する。

ヲギヤチ 萩谷 羽咋郡邑知院内志雄庄に屬する部落。能登名跡志に、『萩野谷村、岡部氏の十村役あり。又齋藤氏先年より數代在郷あり。十人扶持被下也。惣じて此邊往古は入海にて有りしとて、萩野島村・萩野谷村・敷波村などの名ある由。』とある。

ヲクホ 小窪 羽咋郡藤懸郷に屬する部落。

ヲクラサキ 小倉崎 鳳至郡鶴川の部落東方の岬。

ヲグラススイヒツキ 小倉止醉筆記 三十五册。寶曆前後の奇談、及び諸舊記の拔萃等を載せてある。加賀藩に寶曆頃の記録は少いから参考に値する。

ヲグラスウスケ 小倉宗助 前田利常に仕へて七百石を領した。子孫藩に世襲する。

ヲグラニツキ 小倉日記 小倉屋はもと能美郡安宅に住したが、四代傳右衛門の時、元祿九年石川郡松任に移り、八郎左衛門を経て、六代太右衛門の時、天明六年金澤に轉じ、子孫藏宿を業とした。傳右衛門の日記は元祿八年より元文四年に及び、八郎左衛門の日記は元文五年より寶曆三年に及ぶ。後森田平次之を抄出して、小倉日記一冊を作つた。

ヲグラノ 小倉野 能美郡安宅川の下流、安宅札抜町の一角を古へ小倉野というた。戰國の頃一向一揆の巨魁道齋なる者が居て、小倉長者と言はれ、又天正・正保の間には、安宅住吉神社がこゝに鎮座して居たともいふ。

ヲグラブジヨウ 小倉舞杖 金澤の俳人。舍涼に次いで百鶴園八代を襲いだ、今その詳傳を得ぬ。

ヲグラヤアトシ 小倉屋有年 金澤下堤町の藏宿業者で、嘉永前後の人。通稱太右衛門。歌學を田中躬之に學び、鍋屋米積・淺野屋茂枝等と名を等しくした。後災に罹つて業を他に譲り、上堤町に米仲買を營んだが、子息の放蕩によつて産を失ひ、遂に母衣町に移つて歿した。

ヲグラヤサアキ 小倉安職 通稱監之丞。膳左衛門。天明六年養父吉郎左衛門の遺知百石を襲ぎ、武具奉行・江戸御廣式御用人・御書物奉行を經、文政七年五十石を加へ、後南御土藏奉行を兼ね、天保九年七月隱居して悪休齋と號し、十人扶持を受けた。

ヲグラヤデンエモン 小倉屋傳右衛門 北野屋四郎兵衛の子。延寶四年二月四日能美郡安宅に生まれた。幼名仙虎。八年五月外祖父小倉屋清右衛門の名跡を襲いで、又清右衛門

ヲキ—ヲク